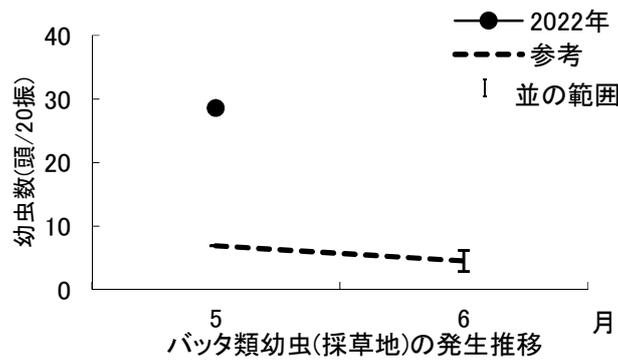


| | | | | |
|-------|---------------|---|----|---|
| 作物 | さとうきび | | 地域 | 宮古群島 |
| 病害虫名 | バッタ類 | | |  |
| 調査結果 | 5 月の発生量 (平年比) | — | | |
| 予報 | 5 月からの増減傾向 | — | | |
| | 6 月の発生量 (平年比) | — | | |
| 予報の根拠 | | | | |

調査結果

今期と平年の推移



・発生種：台湾ツチイナゴ

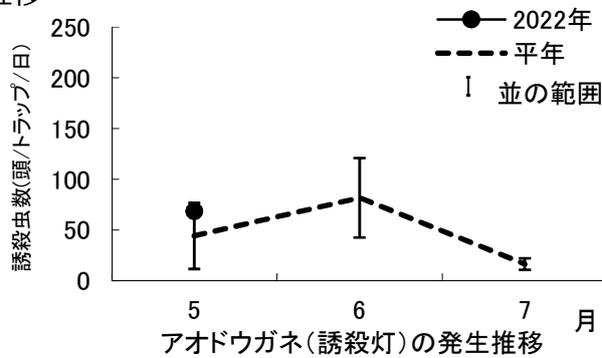
防除のポイント

- ・発生源となるほ場及び周辺のイネ科雑草の除草を徹底する。
- ・幼虫期の防除が効果的なので、6月にほ場周辺の見回りを行い幼虫の早期発見・防除に努める。

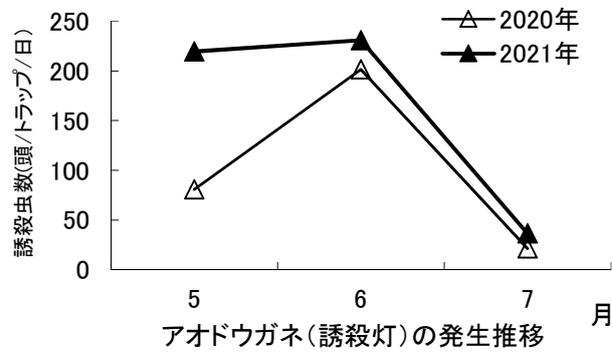
| | | | |
|-------|---------------|---------------|---|
| 作物 | さとうきび | 地域 | 宮古群島 |
| 病害虫名 | アオドウガネ | |  |
| 調査結果 | 5 月の発生量 (平年比) | 並 | |
| 予報 | 5 月からの増減傾向 | ↗ | |
| | 6 月の発生量 (平年比) | 並 | |
| 予報の根拠 | | 平年の発生量の推移 (↗) | |

調査結果

今期と平年の推移

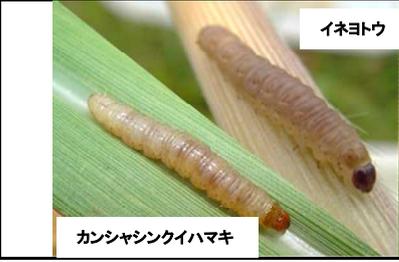


過去2年の推移

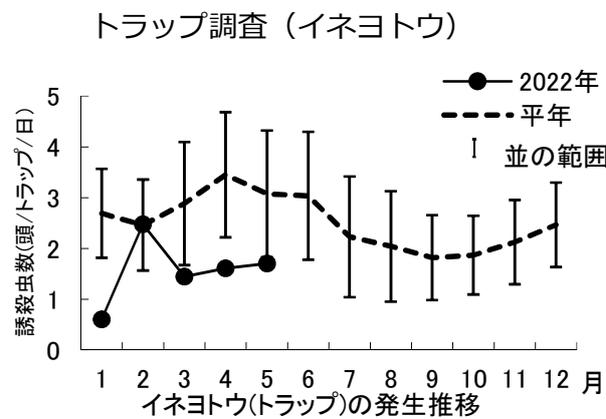
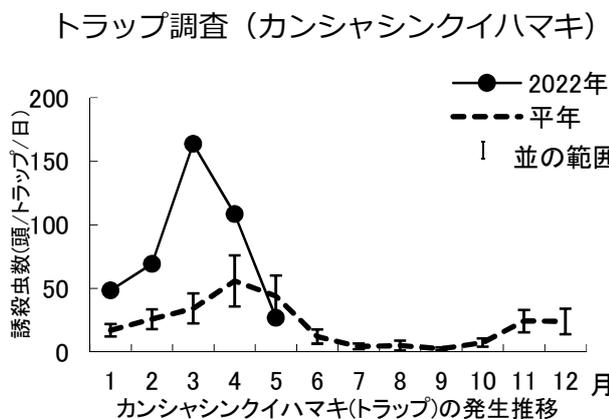
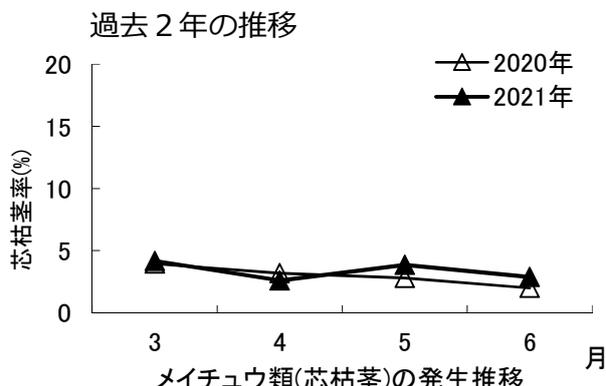
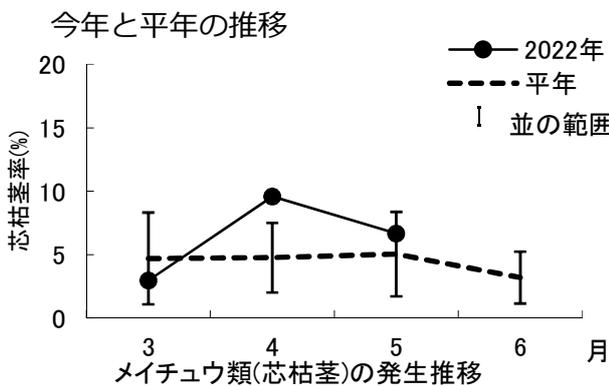


防除のポイント

- ・サトウキビにおけるアオドウガネ被害は、土壌中に生息する幼虫が9月～11月頃作物地下部を食害することにより生じ、収穫期の立枯による減収や株出不萌芽の原因となる。
- ・成虫は5～7月に出現し、テリハクサトベラ等植物の葉を集団で摂食する。食餌植物上で交尾した後地中0～10cm深に産卵する。
- ・成虫発生時期の誘殺灯による大量誘殺、6～9月の幼虫若齢期の薬剤処理及び収穫後のロータリー耕による防除を実施する。

| | | | | |
|-------|----------------------------|---|------|---|
| 作物 | さとうきび | 地域 | 宮古群島 | |
| 病害虫名 | ① メイチュウ類(カンシャシクイハマキ・イネヨトウ) |  | | |
| 調査結果 | 5 月の発生量 (平年比) | | | 並 |
| 予報 | 5 月からの増減傾向 | | | ↓ |
| | | 6 月の発生量 (平年比) | 並 | |
| 予報の根拠 | | 芯枯茎率の平年の発生量の推移 (↓) | | |

調査結果



- ・発生ほ場率：90.0% (平年値：81.0%)
- ・茎内で派生したメイチュウ類のうち、100% (3/3頭) がカンシャシクイハマキであった。

防除のポイント

- ・ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- ・加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、培土時および生育初期の防除を徹底する。
- ・ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- ・乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- ・植え付け時及び培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。